

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 高桑 晴子

高桑晴子氏の 'Domestic Ideology and National Tale in Maria Edgeworth's Novels' は、19 世紀のアングロ・アイリッシュの作家マライア・エッジワースの作品における 'Britain' と 'Britishness' に焦点をあてて、グレートブリテンとアイルランドの連合の時期の「アイルランド」、「女性の教育」、「家庭」、「リージョナリズム」に考察を広げて作品を分析し、その重要性を考察した論考である。

本論文はまずエッジワース受容の歴史を概観し、現在の研究の高まりの必然性を明らかにする。エッジワースの作品は子供向けのもの、風習喜劇的小説、アイルランドを題材とした小説等、多様で、出版当時は知名度も評価も高かったが、20 世紀前半にはあまり読まれなくなる。1970 年代初頭に伝記が出版されて再評価が始まり、その風習喜劇的小説はフランシス・バーニーやジェイン・オースティン等、女性作家の伝統に位置を確立する。同時に『ラックレント城』等の作品はアイルランド文学の伝統の中で評価され、さらに 'Britishness' や複数の 'national identity' の問題が様々な分野で関心を集めると、エッジワース批評はより統合的なアプローチへと変わっていく。

本論文はこのようなエッジワース批評の変遷を踏まえ、当時の女性のアイデンティティとナショナル・アイデンティティの意識を精緻に読み解く。第一部では初期の作品と『ベリンダ』、『リオノーラ』等「風習喜劇的小説」をとりあげる。理性的で知的な女性が理想として描かれるが、ヒロインとして魅力に欠けるというディレンマを伴う。しかしこれらの「地味な」ヒロインは 'Britishness' の美德を体現する存在として表象され、読者にとって理想的な女性像であり得たという論者の考察は見事である。第二部ではアイルランドを扱った小説をとりあげる。『ラックレント城』はアイルランド人の使用人の一人称の語りを、「編者」が編集するという構造だが、これをアイルランドとイングランド/英国の構造にあてはめ、語り手の「アイルランド」を「編者」が、「英国の一部としてのアイルランド」と位置づけていると明らかにする洞察に満ちた分析である。他の三作品では、ナショナル・アイデンティティと「理性的な女性」の関係を考察し、アイルランドの人と文化についての作者のアンビヴァレンスを分析する。第三部では小説『パトロネッジ』を 19 世紀初頭のナショナル・アイデンティティの言説のコンテクストで考察する。さらにアイルランド人作家シドニー・オーウェンソンとスコットランド人作家スーザン・フェリエ、最終章ではジェイン・オースティンをとりあげ、当時のナショナル・アイデンティティをめぐる意識が女性作家の作品にどのように現れているかについて、目配りの行き届いた議論を展開する。

膨大な 1 次、2 次資料を博搜した議論には十分な説得力がある。Romanticism の概念や Britishness と Englishness の関係について、より明確にする必要性も指摘されたが、これは明確な記述が困難な領域であり、論文の内容を損なうものではない。本論文はエッジワースのみならず、オーウェンソン、フェリエやオースティンの作品の新たな読解の可能性を提示し、19 世紀小説研究に貢献するもので、博士号を授与するにふさわしいと考える。